



「研修便り」は、高知市立学校教職員研修の成果・内容の共有、教育研究所から発信する情報の周知を目的として、発行していきます。

令和元年度 第1回生徒指導担当者・生徒指導主事研修会

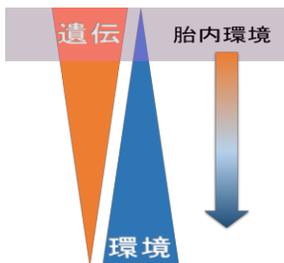
日時：令和元年7月1日（月）

対象：高知市立小・中・義務教育学校 生徒指導担当者及び生徒指導主事

目的 生徒指導担当としての自覚を高めるとともに、生徒指導上の諸課題に対する理解を深め、生徒指導の充実を図る。

【講義】 「子どもの心と知能を育む遺伝子の力・環境の力」

講師：慶應義塾大学医学部 高橋 孝雄 教授



ひとの一生、遺伝と環境

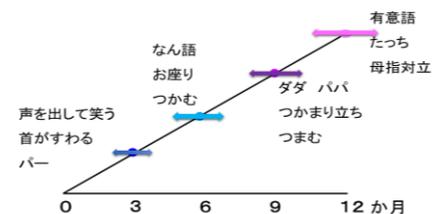
ひとの人生は常に遺伝の力と環境の力がバランスを取っている。人のからだが生作られる過程（成長）と機能が宿る過程（発達）は、ほとんどを遺伝子の力によって決められている。そのことは幸せに生きる最低限の条件を保障している。その後の社会環境、家庭環境、教育環境等、様々な環境要因が人生に大きく影響を与える。小・中学生の時代は、遺伝と環境の人生に与える力のバランスがちょうど入れ替わってくる時期。

個性とは・・・遺伝子が書いたシナリオの余白、ゆらぎ

成長と発達のほとんどが遺伝子の力によって決められているが、その設計図には余白があり、身長や体重の成長にはばらつきがある。機能の発達にも必ずばらつきがある。お座りやつかまり立ち、指を使うなど、高度なことになればなるほど、ばらつきは大きくなり、それは発達におけるゆとりである。学力にも同じことが言える。正常なものには必ずばらつきがあり、それは個性である。

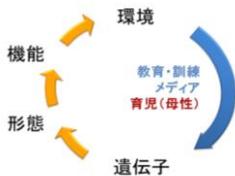
機能が宿る過程（発達）

正常なものには必ずばらつき（個性）がある



環境の力

遺伝子の力によって読み書きが得意な子も苦手な子もいる。それは個性ではあるが、努力や教育によって、右肩上がりに能力が伸びていく傾きは同じ。過去の自分と比べることが大切。



メディアの普及

子どもの
・ 無言化
・ 孤立化
・ 実体験の減少

他者の心を思いやったり、未知の問題について判断したり、問題解決に向けて必要な想像力が育たれなくなる。

昨年よりこんなに読めるようになったね。

補足

バーチャルリアリティは実体験を積み、想像力を育んだ後であれば、あまり問題は無い。

相手の気持ちを汲み取って言葉にできる人

代弁者であるために

- 情報を集める力(傾聴力、目配り力) ⇔ 子どもに寄り添う優しさ
本当の意味での事情を聴く。
本人が言えないこと、言いづらいことを汲み取る。
- 子どもや保護者を納得させる力(説得力) ⇔ 子どもを納得させる強さ
相手の話を聞いてから、優しく根気強く、分かる言葉で話す。

すべてのおとなは

成長・発達の真の意味を理解し、子どもに正しく寄り添いましょう。

子どもたちが困難を乗り越え幸せな人生を手に入れるまでしっかり見守りましょう。

【受講者の感想】

- ・ 小児科医の視点でいろいろお話いただいたことが、教師にも当てはまることだと感じた。「環境」つまり、学校の役割や教師の関わりについても深く考えさせられた。
- ・ 本当の親から欲しい愛情をもらえていないまま、学校に来ている子どもに対して、教員のできることは何かを深く考えさせられた。学校で見えている子どもの行動だけが目に入りがちであるが、本来はその子どもの背景に目を向けていくべきなのだと考えた。

対象：高知市立小・中・義務教育学校 道徳教育推進教師及び参加希望教職員

目的

道徳科の趣旨を踏まえた学習指導の在り方や教育活動全体を通じて行う道徳教育について理解を深め、学校における道徳教育の充実に役立てる。

【講義・演習】「『特別の教科 道徳』の学習指導と評価」 ～指導と評価の一体化をめざして～

講師：京都産業大学 柴原 弘志 教授

認め、励まし、勇気付けていることが伝わる評価が重要である
～評価から学習指導を設計し、学びの姿を授業に創り出す～



子どもたちにどのような学びの姿を求めているかが重要である。学習状況等に係る成長の様子を具体的に想定し、その姿を評価していく。子どもたちを認め、励ます評価語は、通知表のみならず、授業中やワークシート返却の際に積極的に使う。

異なる価値観等が出てくる中心発問を準備し、出てきた発言等を問い返して揺さぶりをかけ、さらに深く自己を見つめさせる。多様な意見交流ができるような学習活動を組み、意図的指名も取り入れて、意見等の多様性を担保する。

心情や判断等の程度を言葉巧みに説明できる子どもは少ない。言葉にできないものは、心情円盤やネームカード等を活用して可視化させるとよい。

道徳科における学習状況等に関する評価の視点例

「評価の視点」の文末を替えて、授業への「評価の観点」として捉えることにより、「指導と評価の一体化」を図る。

- ◇ 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか
 - ① 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしているか
(→考えられるような学習活動を工夫しているか)
 - ② 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直しているか (→見直すことができる発問であるか)
 - ③ 道徳的な問題に対して、自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めているか
(→深めることのできる学習活動になっているか)
 - ④ 道徳的価値を実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしているか (→考えられる指導か)
 - ◇ 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか
 - ⑤ 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え、考えようとしているか
(→捉え、考えることができるような学習活動を工夫しているか)
 - ⑥ 自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしているか (→理解しようとしてできるような指導方法か)
 - ⑦ 複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしているか
(→考えられるような発問を工夫しているか)
- (「研修配付資料」から)

学習状況等に関する評価⇔指導に関する評価

道徳的価値が実現された姿は様々であり、多面的である。また、考える立場や条件を変えるなどして、多角的に考えさせる中で、意見交流をしたうえで、どのような学びの姿が見られたのかといったことを捉える。

「評価の手法」(言語分析と観察による見取り⇒差し支えなければその場で評価)

- 1 ワークシートの記述を分析する(言語分析)
 - (1) 自分の生活や体験からの思考・振り返り→一本線で印をつける
 - (2) 他人の意見を踏まえた思考・振り返り→波線で印をつける
 - (3) これからの自分の生き方に触れた思考・振り返り→二重線で印をつける
- 2 授業における発言を捉える(言語分析)
- 3 成長した子どもの学びの姿(他人の発言をしっかりと聴く等)を見取る(観察)

【質疑応答から】

Q 担任をしていると(発問に対しての自分の考え等を)できるだけ書かせたいが、どうだろうか。

A ここぞというポイントでのみ書かせるとよい。じっくり考える時間を確保するために、宿題や朝読書で教材の先読みをさせてもよい。その際には、初発の感想を書かせておき、短冊にしておくのもよい。授業前と授業後で変容や深まりに教師も子どもも気付くことができる。教材の大枠の内容把握は、教師主導で行う等の工夫により、「自分が自分に自分を問う」時間や交流の時間を確保し、振り返り後に交流することも大事であり、そこで深い学びになることもある。

【受講者の感想】

- ・ 具体例が多く、イメージがもちやすい内容で、悩んでいたことが“晴れる”感じであった。“道徳”に対する意識が十分でなく、前向きに取り組もうとしていない先生方をどのようにリードしていくのか、考えることが多いが、まずは年間35時間を確保したい。「“上手い下手”はあっても行った学校によって差があってはならない」という言葉は心にズシンと突き刺さった。
- ・ 道徳における7つの「評価の視点」で子どもの姿を見取り、それをもとに授業を改善することが大切であることを学んだ。絶えず自分事として考えられるか、また一面的な見方から多面的・多角的な見方へ発展しているかの視点から、子どもの成長が見られるような授業づくりをしていきたい。